

最近の活動から

地域産業研究会の活動は年4回の恒例会、分科会活動、現地見学会の3つが主な活動内容である。現地見学会はこの102号で紹介がある。今回は恒例会と各分科会活動について報告する。

1. 恒例会

9月5日に出席者約30名を集めて第3回恒例会が開催された。テーマは「規制緩和、その後の状況」であり、北海道農業会議 広畑雄三氏を講師に招いて講演と討議を行った。政府は2002年3月、規制緩和推進3カ年計画を策定し、規制改革・緩和の着実な推進を図っている。この結果、計画された917事項のうち約80%にあたる734件がすでに実行に移されている。こうした個々の事項の多くは細かな規制の緩和・廃止であるが、このような一つひとつの措置を積み重ねることにより、硬直化した現在の我が国の社会構造に風穴を開けることが期待されている。

広畑氏には主に農業の分野において規制のあり方、緩和の必要性について話題提供をしていただいた。なお、広中氏の講演に先立ち(有)クレスガーデン代表取締役 干場一正氏より、平成12年に農地転用をして長沼にオープンしたレストランの事例について話題の提供があった。

干場氏は5haの農地を取得し、600坪の敷地にレストランを開業した。その過程で農地取得に関わる規制、農地転用の規制、市民農園とする場合に農地法との絡み、等について具体的な事例と交渉過程を紹介された。

これに対して、広畑氏は問題点を4つ挙げ、具体的に現状の規制の実態をわかりやすく説明された。どうして農地取得が難しいか、農地法がどのような経緯をもって今に至っているか、市民農園を作ると

きに何が問題になっているのか、わかりやすく解説された。

質疑と討議は札幌市の平松さんに司会をお願いして有意義なうちに会は進行した。ここで、規制のあり方、農業と技術、資金のあり方、農業の法人化、農地法と市民農園整備法との対応、後継者問題などについて討議がなされた。当研究会には分科会の一つに規制緩和に関する分科会があり、これらの事例の収集整理を計画している。

2. 分科会活動

当研究会には3つの分科会がある。エゾシカ分科会、地域活性化分科会、規制緩和に関する分科会である。以下にエゾシカ分科会と地域活性化分科会について最近の活動状況を報告する。

(1) エゾシカ分科会

今年度は昨年度までの活動を基に、エゾシカを軸とした環境共生型の新たな産業を目指し「(仮称)エゾシカの飼育による北海道の自律」と題する提言集の取りまとめを行っている。4月以降、ほぼ月一のペースで討議を重ね、原稿の執筆と検討を進めた。

12月現在、原稿がひとつおり、そろった段階であり、今後は、印刷製本に向けた加筆、修正の段階に入る。以下に内容の一端を紹介する。

まず、導入部としてエゾシカを取り巻く現状を述べ、地域資源としてエゾシカの特徴を挙げている。次に、養鹿産業が国の基幹産業になっているニュージーランドの現地視察の結果を示している。ここでは経営規模と経営内容、衛生管理と食肉化のシステム、輸出状況などを紹介している。

これらを踏まえて食肉としてのエゾシカの実態を把握するために調査を行っている。ここでは消費者

とシェフを対象として実施したアンケート結果が示され、消費者と供給者側の現状の問題点を指摘している。消費者向けアンケートでは、現在食肉としてのエゾシカを消費者はどのような観点でとらえているのか、実態が示されており、今後普及に対して何が問題か、浮き彫りにしている。また、シェフ向けのアンケートではシカ肉を食材としてさばいている料理人がシカ肉に対する問題点を指摘している。

これらを受けて北海道における養鹿産業の可能性を検討している。検討ではまず、鹿飼育のモデル案を示し、飼育化の技術、牛と鹿の飼育の比較、食肉化の方法と流通販売経路、副産物利用の利用方法、産業クラスターの構築を経て経営の試算を行っている。

検討結果のまとめとして、養鹿産業振興の課題と解決策を示している。この中には、養鹿を行うための飼育制限、生体確保、牧場の確保、食肉としての安全性、経営の安定性など、多角的な面から養鹿産業の課題と解決策が示されている。

この提言集は当分科会が総力を挙げてまとめた力作であり、年度内の完成を目指している。

(2) 地域活性化分科会

当分科会は寿都町を研究モデル地区に設定して、過疎化する道内の市町村の活性化を検討することを活動方針に据えている。スローガンは「寿都を知ろう・調べよう・考えよう」であり、寿都町とのパートナーシップを基本として研究活動を行っている。

過去3年の研究経過報告を経て現在に至っているが、その間、何回かの活動方針をめぐって激しい議論を重ね、軌道修正もしている。その結果、今後の方針として以下の2つのテーマに重点を置いて活動とすることとしている。

- 1) 「美しい海づくり研究」(美海寿—ミューズ)
- 2) 「寿都ファンクラブ」(共学・共感・共創—共に学び、共に感じ、共に創ろう)

これに伴い新しい視点を導入するため、従来の分科会員のほかに広く会員を募集して活動の再活性化を計っている。

最近の具体的な活動内容を紹介する。8月22日～24日には寿都町の現地調査を行った。この調査は片岡町長や役場の主要な幹部と共に地域資源の再発掘のためのものである。案内役は地元で積極的な活動を展開している住民の方々であり、それぞれ「海へ」「川へ」「山へ」分かれて、埋もれた地域資源の中から新しい発見を見いだす、まさに「宝さがし」の現地研修であった。

また、リージョナルステート研究会が行っている出前授業のサポートにも参加した。出前授業は地元の中学生や先生、教育委員会の方々とともに自分達の住む地域の川の中で新鮮な教材を使った理想的な総合学習の一環となることを期待している。

当分科会活動はこのような自分たちの足で、現地に密着したフィールドの情報をベースにとらえる活動を基本に置いている。その後の住民との交流会では様々なジャンルの職業の方々がそれぞれ関連する技術士との交流が実現できた。

これらの分科会活動に対して寿都町からの推薦で「全国都市再生モデル調査」と「住まい・まちづくり活動団体の実践的な取組みに関する調査」へ応募した。今年は惜しくも選定とはならなかったが、各会員の共通な目標ができ、励みとなった。

以上のように活動は着実に地元の寿都町に認められ調査申請の推薦をして頂けるようになったことは、長く培われた交流の目が結びつつある一端と考えられる。また、技術士の社会貢献の一端を果たしながら技術士の知名度の向上に大きく貢献できたことと考えられる。この寿都町でのモデルケースが現在の北海道が抱える過疎地域の活性化に結びつくことを期待している。

(文責：地域産業研究会幹事 斉藤 和夫)